

福島大学の新学類：理念と構成

The concept and structure of the new faculty in Fukushima University

生源寺眞一*
Shinichi SHOGENJI

1. 新学類設置の背景

福島大学では 2019 年 4 月に向けて、農学系の教育研究組織新設の準備が進んでいる。従来からの学群・学類制のもとで、名称は農学群・食農学類を予定している。1 学年の学生 100 名、専任教員 38 名の規模であり、将来は大学院の設置も視野に入れている。

近年、各地で農学関連学部新設の動きが具体化しているが、東日本大震災と原発事故との関わりが深い点に福島大学の場合の特徴がある。復興作業が本格化するなかで、2013 年の段階から県内の自治体や農林業関連団体などが農学系組織の設置を求める強い要請を寄せていた。農林漁業と農山漁村の再生には現場に即した科学的知見が不可欠であり、専門的な人材の養成も急務だとの認識からであった。

地域からの要請を重く受け止めた福島大学は、2014 年度の後半には新学類設置に向けた取り組みを本格化した。県内の自治体などからは、組織の拠点の設置を希望する動きも活発化する。すなわち、2016 年には自治体もしくは自治体の連合体から 9 件の要請が寄せられた。こうした要請には自治体のさまざまな判断や意思が反映されていると考えられるが、農学の教育研究の現場が近くに存在することが地域の健全な発展に結びつくとの認識があったことは間違いない。

福島大学では、新組織を現在の 2 学群 4 学類が位置する福島市金谷川のキャンパスに設置することにしたが、自治体からのキャンパス招致要請に込められた意向を真摯に受け止め、県内の市町村をフィールドに展開する農学実践型教育の導入など、地域と密接に連携した教育研究のシステムの構築を図ることとした。

2. 新学類の教育理念

新学類の教育の基本方針は、農学を総合的・実践的に学び、食料・農林業・地域社会が直面する課題の解決に貢献できる知識・技能と応用力を備えた人材を養成することである。この基本方針のもとで人材養成の具体的指針を定めた。すなわち「実践性」「学際性」「国際性」「貢献性」の 4 つの能力の観点から、求める人材像を以下のように提示している。

A：農学の専門知識を関連産業や地域社会の実践的な取り組みにつなげる力
本来の農学は課題解決への貢献を第一義とする学問として発展してきた。このような特性を有する農学から学んだ専門的な知識・技能の価値について、関連産業や地域社会の具体的な取り組みとの関わりにおいて認識できること。

B：異なる専門分野との学際的な交流によってチームプレイを推進できる力
自然資源に依存する衣食住の供給システムは地域環境・農林業・製造業・流通業等の連鎖として機能している。連鎖の各領域に専門化した農学を学びながらも、領域を超えた学際的な理解力と発信力を培うことで、連鎖総体のレベルアップを常に意識できること。

C：グローバルな科学的知見や国際比較の情報を地域の課題解決に活かす力
立地特性の強い農林業や食品産業にも、地域や国を超えた共通の要素が含まれている。グローバルに認知された科学的知見を応用する手法を学ぶとともに、地域固有の課題の解決に向けた国際比較や国際交

* 福島大学農学系教育研究組織設置準備室

キーワード：食農学類 原発事故 地域貢献 フードチェーン

流に挑戦できること。

D：温かい眼差しと冷静な分析力によって地域社会への貢献を持続できる力
震災・原発事故からの復興に深く関わる本学類の農学教育は、歴史的・国際的にも類例のない取り組みである。科学的なエビデンスと論理性を大切にする冷静な分析力を身に付けるとともに、長期の時間視野から地域貢献の意義を理解できること。

3. 新学類の構成

食農学類の特徴は、フードチェーンつまり食の流れを念頭に置いた専門コースを設定する点にある。学生は2年次の後半からコースに所属する。コースの構成を食の流れに沿って示すならば、下記のとおりである。ただし、カッコ内は専任教員数であり、科目名は専任教員の主担当科目である。

[生産環境学コース (10)]：森林科学、森林育成学、森林保護学、森林利用学、里山管理論、農村計画学、水資源利用学、土壌物理学、農業リモートセンシング、スマート農業論

[農業生産学コース (10)]：作物育種学、稲作学、環境保全型農業論、野菜・花き園芸学、果樹園芸学、応用昆虫学、植物病理学、土壌科学、植物栄養学、飼料資源学

[食品科学コース (10)]：食品機能学Ⅰ、食品機能学Ⅱ、食品分析学、食品素材科学、食品加工学Ⅰ、食品加工学Ⅱ、食品保蔵学、発酵・醸造学Ⅰ、発酵・醸造学Ⅱ、食品安全学

[農業経営学コース (8)]：農業経営学、協同組合論、食品マーケティング論、フードシステム論、農産物物流通論、農業経済学、農業政策学、農林資源経済論

農業農村工学領域の専門科目は上流に対応する生産環境学コースに配置されている。川下の食品科学のウェイトが大きい点も特徴のひとつである。また、農業経営学コースは流れの中流に位置する農業の現場を対象にするとともに、食の流れをつなぐ食品マーケティングやフードシステムなどにも力点を置いている。

4. むすび

前述の教育理念、とくに貢献性の部分を起草していた際に念頭にあったのは、経済学の始祖のひとり、A.マーシャルがケンブリッジ大学で行った教授就任講義の一節だった。すなわち、「冷静な頭脳と温かい心情」(cool heads but warm hearts)の持ち主を育成したいとの心情が吐露された。マーシャルは研究者を念頭に置いていたが、むろん食農学類の卒業生には地域の産業や自治体で実務に携わる若者も多いに違いない。だとすれば、warm hearts but cool headsのほうがぴったりくるかもしれない。

食農学類は、温かい眼差しと冷静な分析力で地域貢献できる人材育成を目指す。教育内容にも工夫を凝らすことになる。けれども、この目標に近づくためにもっとも大切なことは、ほかならぬ教員自身がcool heads but warm heartsを体現し続けることであろう。